

日本の昔話の展開

大島建彦

○『小学国語読本』巻三「十五、一寸ボフシ」

オヂイサントオバアサンガアリマシタ。子ドモガナイノデ、

「ドウゾ、子ドモヲ一人オサツケ下サイ。」

ト、神サマニオネガヒシマシタ。

男ノ子ガ生マレマシタ。小指グラキノ大キサデシタ。アンマリ小サイノデ、一寸ボフシトイフ名ヲツケマシタ。

一寸ボフシハ、二ツニナツテモ、三ツニナツテモ、少シモ大キクナリマセン。オヂイサントオバアサンハ、シンバイシテ、

「一寸ボフシノセイガ、高クナリマスヤウニ。」

ト、毎日、神サマニオイノリシマシタ。ケレドモ、ヤッバリ生マレタ時ノマ、デシタ。

一寸ボフシハ、十三ニナリマシタ。アル日、オヂイサントオバアサンニ、

「ミヤコへ行ッテ、エライ人ニナリタイト思ヒマス。少シノアヒダ、オヒマヲ下サイ。」

トイヒマシタ。
一寸ボフシハ、オバアサンカラ、針ヲ一本モラヒマシタ。ソレヲ刀ニシテ、ムギワラノサヤニ入レテ、コシニサシマシタ。ソレカラ、オワンヲモラッテ、舟ニシマシタ。オハシヲモラッテ、カイニシマシタ。

一寸ボフシハ、オワンノ舟ニノッテ、オハシノカイデジャウズニコイデ、大キナ川ヲノボッテ行キマシタ。ミヤコニツクト、トノサマノオヤシキへ行キマシタ。

「ゴメン下サイ。」

トイフト、トノサマガ出テオイデニナリマシタ。ガ、ダレモキマセン。

「ダレダラウ。」

トイッテ、方々オサガシニナリマシタ。

「ドコニキルノダラウ。」

トイッテ、庭ヲ見マハシナガラ、アシダヲオハキニナラウトシマシタ。スルト、ソノアシダノカゲニキク一寸ボフシハ、

「フンデハイケマセン。」

トイッテ、アワテテトビ出シマシタ。サウシテ、

「ケライニシテ下サイ。」

トタノミマシタ。トノサマハ、

「コレハオモシロイ子ダ。」

トイッテ、ケライニナサイマシタ。

三年バカリスギマシタ。一寸ボフシハ、アル日、オヒメサマノオトモヲシテ、遠イ所へ出カケマシタ。

トチュウマデ来ルト、ドコカラカ、オニガ出テ来テ、一寸ボフシヤオヒメサマヲタベヨウトシマシタ。

一寸ボフシハ、針ノ刀ヲヌイテ、オニニ向カヒマシタガ、トウくツカマッテシマヒマシタ。オニハ、一寸ボフシヲツマンデ、一口ニノンデシマヒマシタ。

一寸ボフシハ、オニノオナカノ中ヲ、アチラコチラトカケマハッテ、針ノ刀デ、チクリチクリトツ、キマシタ。オニハ、

「イタイ、イタイ。」

トイヒマシタ。

ソノウチニ、一寸ボフシハ、オナカノ中カラハヒ上ッテ、ハナノオクヲトホッテ、目ノ中へ出マシタ。サウシテ、針ノ刀デ目玉ヲツツキマハッテ、ビョコリト地メンヘトビ下リマシタ。オニハ、目ノ中ガイタクテナリヤセン。目ヲオサヘテ、一生ケンメイニニゲテ行キマシタ。ウチデノコツチモ、ワスレテニゲテ行キマシタ。

オニノワスレタウチデノコツチヲ見ルト、オヒメサマハ、

「コレハヨイモノガアル。」

トイッテ、大ソウヨロコビマシタ。コレヲフルト、ナンデモジブンノ思フトホリニナルカラデス。ソコデ、

「一寸ボフシノセイガ、高クナルヤウニ。」

トイッテ、オヒメサマハ、サソクウチデノコツチヲフリマシタ。

一寸ボフシノセイガ、少シ高クナリマシタ。

「モット高クナレ、モット高クナレ。」

トイヒナガラ、ナンベンモフリマシタ。一寸ボフシハ、ダレニモマケナイ大男ニナリマシタ。

○ 渋川清右衛門版御伽草子『一寸法師』

中ごろのことなるに、津の国難波の里に、おほちとらばと侍り。うば四十に

及ぶまで、子のなきことを悲しみ、住吉に参り、なき子を祈り申すに、大明神

あはれとおぼしめして、四十一と申すに、ただならずなりぬれば、おほち、喜

び限りなし。やがて十月と申すに、いつくしき男子をまうけけり。さりながら、

生れおちてより後、背一寸ありぬれば、やがて、その名を、一寸法師とぞ名づ

けられたり。

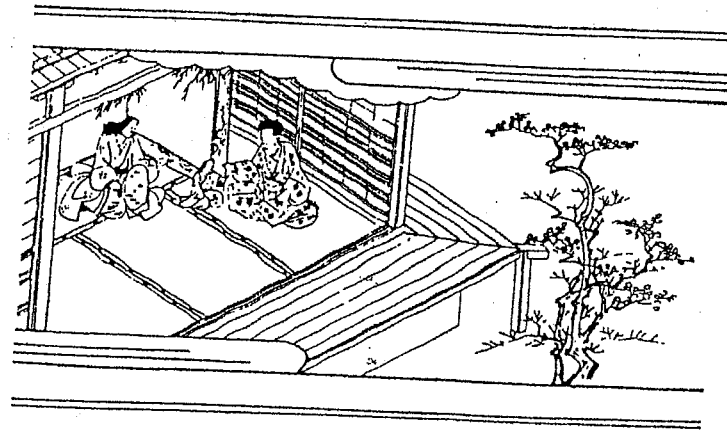
年月を経るほどに、はや十二三になるまで育てぬれども、背も人ならず、つ

くづくと思ひけるは、ただ者にてはあらざれ、ただ化物風情にてこそ候へ、わ

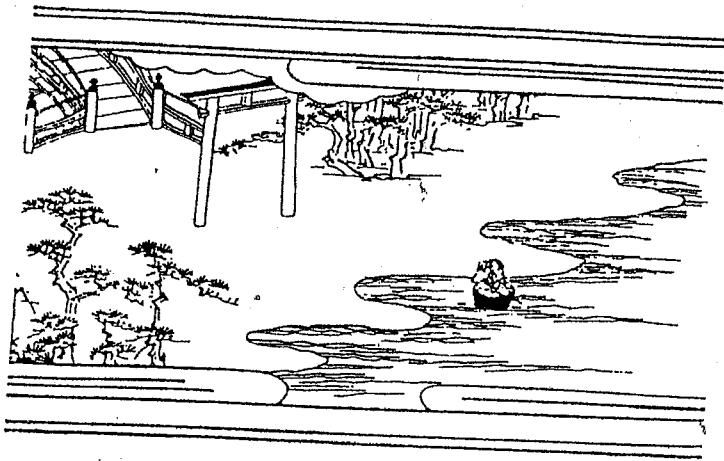
れら、いかなる罪の報いにて、かやらの者をば、住吉より給はりたるぞや、あ

さまじきよと、見る目も不便なり。夫婦思ひけるやうは、あの一寸法師めを、いづかたへもやらばやと思ひけると申せば、やがて、一寸法師、このよし承り、親にもかやうに思はるるも、口惜しき次第かな、いづかたへも行かばやと思ひ、刀なくてはいかかと思ひ、針を一つらばに請ひ給へば、取り出したびにける。すなはち、麦藁にて柄鞆をこしらへ、都へ上らばやと思ひしが、自然舟なくてはいかがあるべきとて、またらばに、「御器と箸とたべ」と申しうけ、名残惜しくとむれども、立ち出でにけり。住吉の浦より、御器を舟としてうち乗りて、都へぞ上りける。

住みなれし難波の浦を立ち出でて
都へ急ぐわが心かな



かくて、鳥羽の津にも着きしかば、そこもとに乗り捨てて、都に上り、ここやかしこと見るほどに、四条五条の有様、心も言葉にも及ばれず。さて、三条の宰相殿と申す人のもとに立ち寄りて、「もの申さん」と言ひければ、宰相殿はきこしめし、おもしろき声と聞き、縁のはなへ立ち出でて、御覧ずれども、人もなし。一寸法師、かくて、人にも踏み殺されんとて、ありつる足駄の下にて、「もの申さん」と申せば、宰相殿、不思議のことかな、人は見えずして、おもしろき声にて呼ばはる、出でて見ばやとおぼしめし、そこなる足駄はかと召されければ、足駄の下より、「人な踏ませ給ひそ」と申す。不思議に思ひて見れば、一興なる者に



てありけり。宰相殿御覽して、「げにもおもしろき者なり」とて、御笑ひなされけり。(絵)

かくて、年月送るほどに、一寸法師十六になり、背はもとのままなり。さる

ほどに、宰相殿に、十三にならせ給ふ姫君おはします。御かたちすぐれ候へ

ば、一寸法師、姫君を見奉りしより、

思ひとなり、いかにもして案をめぐら

し、わが女房にせばやと思ひ、ある

時、みつものの打撒取り、茶袋に入

れ、姫君の臥しておはしけるに、はか

りことをめぐらし、姫君の御口にぬ

り、さて、茶袋ばかり持ちて泣きあた

り。宰相殿御覽して、御尋ねありけれ

ば、「姫君の、わらはがこのほど取り

集めて置き候ふ打撒を、取らせ給ひ御

参り候ふ」と申せば、宰相殿おほきに

怒らせ給ひければ、案のごとく、姫君

の御口に付きてあり。(絵)まことは偽りな

らず、かかる者を都に置きて何かせ

ん、いかにも失ふべしとて、一寸法師

に仰せつけらるる。一寸法師申しける

は、「わらはがものを取らせ給ひて候

ふほどに、とほかくにもはからひ候へ

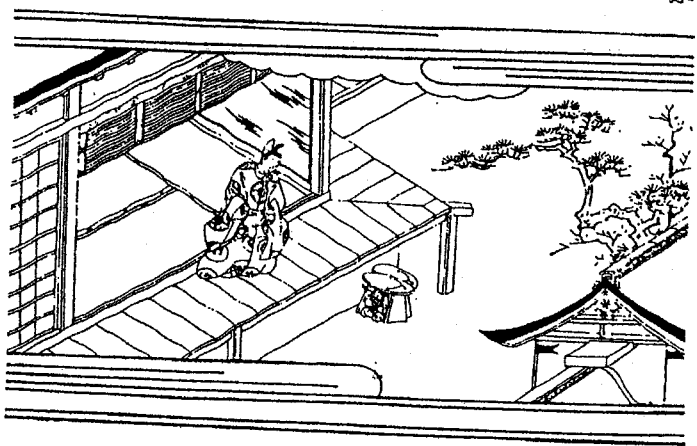
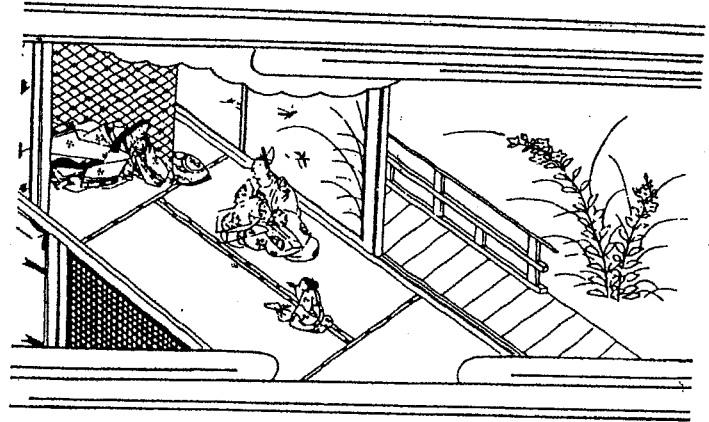
とありける」とて、心の中に嬉しく思

ふこと限りなし。姫君は、ただ夢のこ

こちして、あきれはててぞおはしける。一寸法師、「とくとく」とすすめ申せ

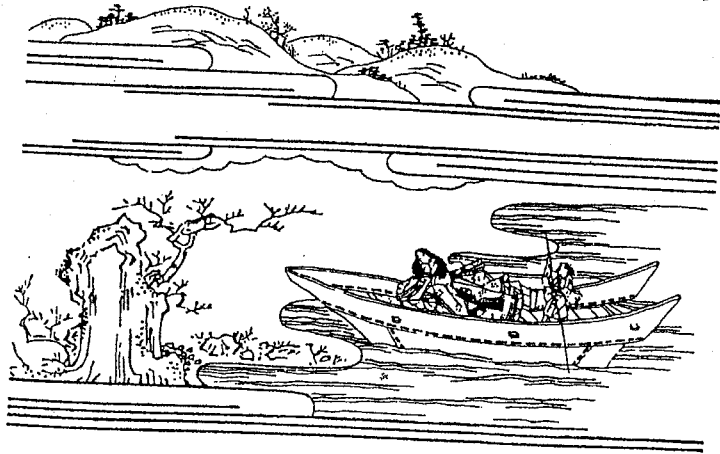
ば、闇へ遠く行く風情にて、都を出でて、足に任せて歩み給ふ、御心の中、推

し量らひてこそ候へ。あらいたはしや、一寸法師は、姫君を先に立ててぞ出で



にけり。宰相殿は、あはれ、このことをとどめ給ひかしておぼしけれども、
母のことなれば、さしてとどめ給はず、女房たちも付き添ひ給はず。
姫君、あさましきことにおぼしめして、かくていづかたへも行くべきならね

ど、難波の浦へ行かばやとて、鳥羽の
津より舟に乗り給ふ。折節、風荒くし
て、興がる島へぞ著けにける。舟より
あがり見れば、人住むとも見えざりけ
り。かやうに風悪く吹きて、かの島へ
ぞ吹き上げける、とやせんかくやせん
と思ひわづらひけれども、かひもな
く、舟よりあがり、一寸法師は、ここ
かしこと見めぐれば、いづくともな
く、鬼二人来りて、一人は打出の小槌
を持ち、いま一人が申すやうは、「吞
みて、あの女房取り候はん」と申す。



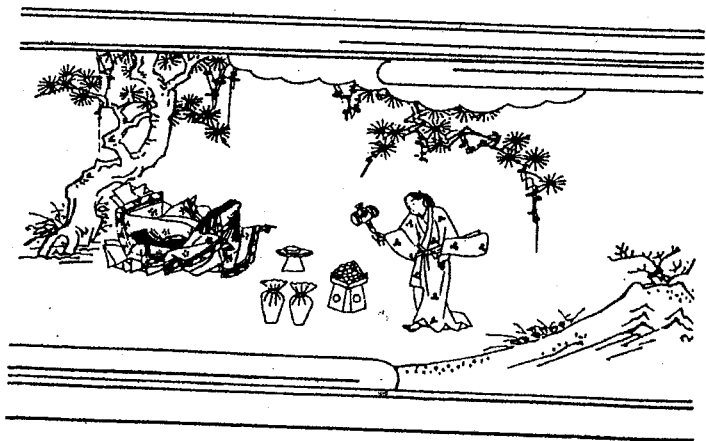
口より呑み候へば、目の内より出でに
けり。鬼申すやうは、「これはくせも
のかな。口をふさげば、目より出づ
る」。一寸法師は、鬼に吞まれては、
目より出でて飛び歩きければ、鬼もお
ぢをののきて、「これはただ者ならず、
ただ地獄に乱こそ出で来たれ。ただ逃
げよ」と言ふままに、打出の小槌、
杖、しもつ、何に至るまでうち捨て
て、極楽浄土の乾の、いかにも暗き所



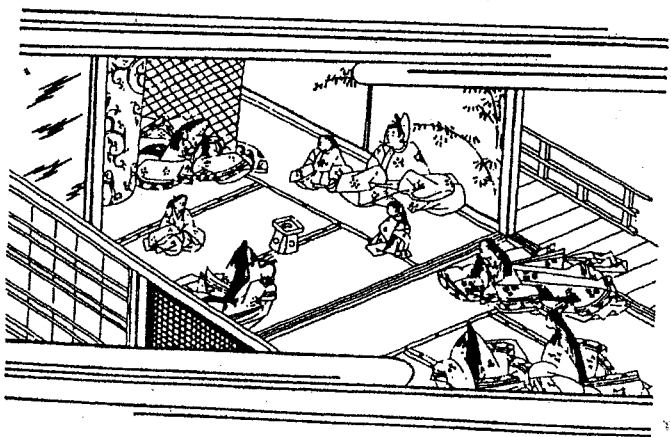
へ、やうやう逃げにけり。さて、一寸法師は、これを見て、まづ打出の小槌を
監妨し、「われわれが背を、大きになれ」とぞ、どうど打ち候へば、程なく背
大きになり、さて、このほど疲れにのぞみたることなれば、まづまづ飯を打ち

出し、いかにもうまさうなる飯、いづくともなく出でにけり。不思議なるしあはせとなりけり。

その後、金銀打ち出し、姫君ともに都へ上り、五条あたりに宿をとり、十日ばかりありけるが、このこと隠れなければ、内裏にきこしめされて、急ぎ一寸法師をぞ召されけり。すなはち、参内つかまつり、大王御覧じて、「まことにいつくしき童にて侍る。いかさま、これは賤しからず」、先祖を尋ね給ふ。おぼちは、堀河の中納言と申す人の子なり。人の讒言により、流され人となり給ふ、田舎にてまうけし子なり。うばは、伏見の少将と申す人の子なり。幼き時より、父母におくれ給ひ、かやうに心も賤しからざれば、殿上へ召され、堀河の少将になし給ふこそめでたけれ。父母をも呼び参らせ、もてなしかしづき給ふこと、世の常にてはなかりけり。



さるほどに、少将殿、中納言になり給ふ。心かたち、はじめより、よろづ人にすぐれ給へば、御一門のおぼえ、いみじくおぼしける。宰相殿きこしめし、喜び給ひける。その後、若君三人出で来けり。めでたく栄え給ひけり。



住吉の御誓ひに、末繁昌に栄え給ふ。世のめでたきためし、これに過ぎたることはよもあらじとぞ申し侍りける。

○ 福島県郡山市田村町駒板篠坂 吉田けさみ(明治四十年生) 「指っこ太郎」

昔ね、おばあさんがとりにあって、そうして、おばあさんが、やっぱりその、おじいさんと二人でいて、子供がさずからなかつたんだね。そうしてこんど、山にいったところが、その親指にとげがささつたんだ。そして、医者さまささいったところが、「その何ともこれ、指がいたくしょうがないから、はばりさしてください」っていったらば、そして、そのはばりさしたらば、そして、ちよこつと思つたらば、こどもだつたそうなの。そして、指っこ太郎という名をつけて、それから、だんだんに育つて「御飯を食べたい」。それでは、小さいから、一粒食べせたらば、「一粒でなく二粒食べたい」。それから、だんだん食べて、それから、「何か楽しみあつか」つたら、「おれは魚売りになりたいんだ」。それで、魚売りになりたいつたつて、小さいんだから、なじょうもないから、鯛一ぴきしよわせたそうだ。そして、鯛一ぴきしよつて、どこあるつたつて、小さいから売しようがない。それから、「鯛いんねかい、鯛いんねかい」つて、売つてあるつた。そうしたらば、何だか声が高いんだけれども、みえないんでもつて、提灯をつけてみたらば、割り木のわっぱにはさまつていたそうだ、小さいからね。そうしてこんど、「あんた、鯛売りたいか」、「鯛売りさきたんだ」、「そんなじゃあ、おれ一ぱい買つてやつから、おめえ泊つてげ」。そうして、泊つていくうちに、こんどは、山んぼというのまつて、「おめえみてえな小さいものはのんでしまふぞ」。それで、腹にのまつてから、あばれたらば、「宝物くれつから出てくれよ、出てくれよ」つて。そうして、「宝物ほんどにくれんならば出ます」。そうして、山んぼがはき出したところが、小槌をもらつたそうなの。それで、「その小槌で一つはたくと一寸育つ、二つはたくと二寸育つという小槌だから、これではたくと体が大きくなりますよ」と。そうして、大きくなつて、「おばあさん、おじいさんが待つているんだらうから、行つて安心させなさい」つて。ながくいる家だから、三日五日には帰つてこれない。そうして、大きくなつてきたらば、「はあ、これは指っこ太郎で、さすけた子供だ、うちやることはできないんだべなあ」つて。年とつてはあ、おじいさん、おばあさんが、待つてもこないと思つてたら、大きな体になつてきたので、そうして、「こつういふわけで、鯛を売つてもらつて泊つてきたけんども、山んぼにのまつたから、腹であばれたらば、小槌をもらつて、一つはたくと一寸育つ、二つはたくと二寸育つというので、それで大きくなつてきた」。 「いやいや、こつういふ大きくなつて帰られべと思わなかつたよ」つてよろこんで、よろこんだために、おじいさん、おばあさんは、世をおえてしまった。

○能田多代子氏『手つきり姉さま』（青森県三戸郡五戸町）「すねこたんぼ」

昔、爺と婆とあつた。爺の脛が大変腫れてどうかだったので、木尻（土間に面した炬の一方で長い薪を置く側）に（坐って）ねまつていて、婆に茨を取って来いといって持つて来てもらつた。爺は腫物かと思つて茨を脛に通したら、うみが出ないでぼちちと固まりが取れた。そしてその中から小さなめごいおぼこが生れた。そこで脛から生れたから、すねこたんぼこと命名した。大事に育てたが、一向大きくならない。

ところがその村の金持に一人の娘があつた。そこへすねこたんぼは始終遊びに行つていた。あるときシトギを拵えてもらつて金持の家へ行き、節穴から娘の寝ている部屋へはいつて娘の口のまわりにシトギをなすりつけた。そしてすねこたんぼは台所へ行つて、おえおえ泣いていたら、「この生れ（生れそこないは）ぞぐなアや、なして泣でらけア」と誰かがいつたら、「姉様、私エのシトギ取つて食てしまつたおんの」といつてすねこたんぼこ泣いていた。それを聞きつけて娘の母が出て来て、「何不自由なく育つていながらこんな生れそこないの物を取つて食うものア（あろうか）あんだな、お前のようなものは、どこ（どこなりと）だりき行け、これさでもかだつて行かねア」といつて大変に怒つた。娘も肝を焼いて外へ出たら、すねこたんぼこが引張つて連れて行つた。

途中まで来たら、子供たちが鼠を捕つて遊んでいたので、「わらさどアわらさどア、私エさその鼠売れ」といつたら、子供たちは「わらさどばなんだば、生れぞこないのくせに欲しながら呉るア持つて行け」といつた。そうして鼠を助けてやつたら、鼠は大変によろこんで「すねこたんぼこ様のお蔭で助かりました。お礼によいもの上げますしけア、どうかここを覗いて見ていて下さい」と、穴の中へ入つて行つて、また出て来て、「この延命小槌（といて）でへつて、この槌振つて、大きくなれといつて叩けば大きくなるし、また錢でも金でも着物でも家でも望みの物を頼めば、なんでも出るからといつて呉れた。すねこたんぼこはそれをもらつて早速、大きくなれといつて叩いたら、いままですきかつたものが大きくなつた。羽織袴が出るといふと羽織も袴も出たので、それを着て、立派な若者になり、娘の手を引いて家に帰つた。爺婆は「どこ（御子風様）のあいな様でござすが、どこの姉様でござすが、敷く物もないで、やばちくてやばちくて、まんつまんつ、どうがお休めア下さい」といつたので「わエだ、わエだ、すねこたんぼこだ」といつて爺婆を驚かした。そこで立派な家を建て娘の両親も呼んで家振舞いをした。そして両親の帰りに夜道が暗いだろうといつて、古家に火をつけ灯の代りにしてケアド（道壁）を明るくして帰し、皆安楽に暮らした。どつとはらい。ケアド、街道の誰りであるうが、かきようがない。発音通りに記せばケアドの方が当ると思ふ。）

○ 岩倉市郎『南蒲原郡昔話集』(新潟県三条市遅場) 「田螺息子」

昔ある所に爺さんと婆さんがありました。子供がないのでせつ、のうて、村の鎮守様ちんじゆに、どんげな子でもよ
いすけね一人授けておくんない、と願かけしました。ところがその願が叶って婆さんが小さな田螺たごの子
を生みました。田螺の子でも神様の申し子だからと言うて、だいに育ててみたが、いつまでたっても
大きくならない。二十二の齢になってある日のこと、つぶの息子は、「爺さん、婆さん、おら二十二の齢にも
なったから一稼ぎして来うと思うすけに、暇くれてくらっしやい。」と言うて、婆さんにこうせいを三合
こさえてもらって、それを腰につけて家を出ました。

つぶの息子はだいぶ歩いて、ある村へ来ました。そして村の内では一番りっぱな家のがんぎ(庇)の所
へ来て、「今日は、今日。」と呼ぶると、旦那が出て来て、あたりを見回したが誰もいない。変だと思っ
ていると、また「今日は、今日は。」と言う。よく見ると木の葉の下に、つぶの息子がいて、「旦那様、私
をこのうちの若い衆に置いておくんない。」と言う。旦那もおもしろいと思つて、若い衆に置くこと
にしました。ところが、このつぶの息子は何でもよく働いたが、藁打ちわらうちが何よりもじょうずだったので、
毎日藁を打たせることにしました。

旦那の家には二人の美しい娘がありました。つぶの息子は夜寝る時は必ずこうせいの袋を枕元に置い
て寝たが、ある夜の夜中にこっそり起き出して行って、姉娘の口にこうせいを塗って、明くる朝になって
「旦那様、あねさんが毎晩俺のこうせいを盗んでなめるすけに、俺の嬢かみにならんば勘弁ならん。」と言うて
駄々だだを言いました。それを毎晩やるので旦那が困って、姉娘を呼んでその話をする、姉娘は「どうや
い、(怒って)、ある夜さい槌つづみをたがえて来て、つぶ息子を一打ちたたきつぶしてやろうと、そのへやに忍
び込みました。ところが、つぶ息子がまた「こうせん盗みに来たいやあ。」と言うて騒ぎ立てたので、あ
ねさんはあわたえて逃げてしまいました。あねさんはますます業焼いて、今度こそはと言つて次の晩もその
次の晩も出掛けたが、何べんやってもつぶに騒ぎ立てられるので失敗ばかりかしている。ところがある夜ど
うしたのか、つぶ息子がぐっすり眠っている、この時だとばかりさい槌つづみを振り下したら、ジャンジャ
ラジャンという大きな音がして、つぶはいつの間にか大きいりっぱな婿さんになって、そこに立ってい
ました。あねさんは業焼くどころか、大喜びで嫁になることを承諾したので、旦那に相談して二人は爺さ
と婆さんの家へ帰りました。爺さんも婆さんも、つぶの子がこんなりっぱな息子になって、それに美しい嫁さ
までも連れて来たので、こんなおめでたいことはないと言つて喜んだと言つてのことです。

(加無波良夜譚 今井そよ女)

○ 柳田國男監修『日本昔話名彙』

完形昔話「誕生と奇瑞」……「一寸法師」

「不思議な成長」……「蛇息子」「田螺長者」「蛙簪入」「蛞蝓簪」

○ 関敬吾『日本昔話大成』

本格昔話「誕生」……「一三四 田螺息子」「一三五 蛙息子」「一三六 一寸法師」

「一三七 親指太郎」「二四〇 力太郎」

笑話「狡猾者譚」……「五二一 殿様と小僧」

○ 『日葡辞書』

「Issumbōxi Fiqiño」

○ 喜多村信節『嬉遊笑覽』

俗に矮人を一寸法師といふ。法師は小法師といふより小さきものを名づく。能の狂言に小児をかな法師と言へるはそのかみの俗称なり。

○ 『浪花方言』『俚言集覽』

彦八、豆蔵なり。

「小き子」の地方別分布

計	d D型	d C型	d B型	d A型	c D型	c C型	c B型	c A型	b D型	b C型	b B型	b A型	a D型	a C型	a B型	a A型
九六	二	一二	〇	〇	三三	〇	一六	〇	一二	八	一二	一	一	〇	〇	〇
二五	〇	一八	〇	〇	一	三	〇	〇	〇	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇
七二	六	一五	二	一	九	〇	二七	〇	一	四	五	〇	一	〇	一	〇
七	〇	三	〇	〇	三	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
四九	三	一一	一	二	二三	一	〇	一	一	四	〇	二	〇	〇	〇	〇
九	一	三	〇	五	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三六	七	一〇	一	〇	一一	〇	五	一	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一六	二	一	〇	〇	一	〇	三	〇	五	〇	二	〇	一	〇	一	〇
三二〇	二一	七三	四	八	八〇	五	五一	二	一九	二〇	一九	三	三	〇	二	〇

奥羽
関東
中部
近畿
中国
四国
九州
南島
計